



「地球観測・予測データの活用によるSDGsへの貢献」中間とりまとめ（案）概要

本報告書（中間とりまとめ）では、特にSDGsへの貢献に向けた気候変動分野の取組、地球観測・予測データに関するデータ・解析プラットフォームに関する検討を重視。実施方針フォローアップ報告書の実施方針の今後の方向（4項目）に基づき、今後の施策について提言を行う。

地球観測・予測データによるSDGsへの貢献の現状

<SDGsへの活用事例及び可能性>

海洋観測データ…海洋酸性化、栄養塩供給メカニズム、海洋プラスチック汚染、海洋観測網

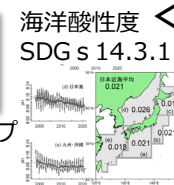
地上観測データ…河川・湖沼の水質、モデルシミュレーション

気候変動予測データ…治水対策、気候変動財務リスク評価

衛星観測データ…熱帯林保全管理、洪水被害軽減、SDGs指標、火山・地震被害軽減、大気汚染物質監視、温室効果ガス観測、国際開発金融など



マングローブマップ
SDGs 6.6.1



海洋酸性度
SDGs 14.3.1

<データプラットフォームの国内外の動向>

米国：NOAA Big Data Program
欧州：Copernicus Project
豪州：Open Data Cube
国内：DIAS、Tellus、A-PLAT、

1. 地球観測情報をデータ利活用の現場に繋ぐ取組の強化

【課題】

- SDGsの実現を担う者（エンドユーザー）は、どのように地球観測・予測データを利活用できるのか認知できていない
- データバリューチェーンが形成できていない
- 地球観測・予測分野の研究者だけではエンドユーザーが必要とするインテリジェンスは生み出せない

【方向】

- 地球観測・予測データがSDGsに貢献できるサービス（現場）の特定
- インテリジェンスを提供する「主体」「技術」「サービス」の創出・形成
- サービス提供分野の研究者等が参画した技術開発

2. 課題解決を志向した地球観測インフラの長期性・継続性の確保

【課題】

- 利用者ニーズの起伏が激しく観測継続の評価・意思決定が難しい
- 観測の開始・終了を評価する主体（会議体）が多く存在し、コミュニケーションが限定的
- データ欠損は観測データの価値・信頼性を著しく低下させる

【方向】

- 観測の長期性・継続性を確保するための動機付けと効率的なガバナンスが必要
- 動機付けとして、SDGs関連の取組等を活用

3. 予測情報の高精度化

【課題】

- 気候予測情報には依然として大きな不確実性が存在
- 不確実性を認識しながらも、気候予測情報を利活用したいユーザーが存在
- 不確実性に関するユーザーの理解は必ずしも十分ではない

【方向】

- 不確実性の低減に向けた研究開発が必要
- 気候予測情報の不確実性に関するユーザーの理解向上が必要

4. 共通的・基盤的な取組の推進とイノベーションへの貢献

【課題】

- 利用したいデータが国内外のサイト毎に分散し、データへのアクセスが煩雑
- データの利用の仕組みが複雑
- データをどのように利用すればよいのかわからない

【方向】

- ユーザーが利用し易いデータ・解析プラットフォームの形成が必要
- ユーザーとプラットフォームがアプリケーションとプラットフォームを共同開発する仕掛け（エコシステム）が必要

気候サービス産業の形成

気候変動インテリジェンスを生み出す技術開発

気候レジリエンスに向けたコミュニティ形成

地球観測・予測重点課題の設定

地球観測連携拠点の再設定

関係会議との連携強化

SDGs関連の取組・国際プロジェクトの戦略的活用

地球観測データの活用

AI等を活用した予測データの創出

データ利活用に関する情報提供（事例集・ガイドライン）

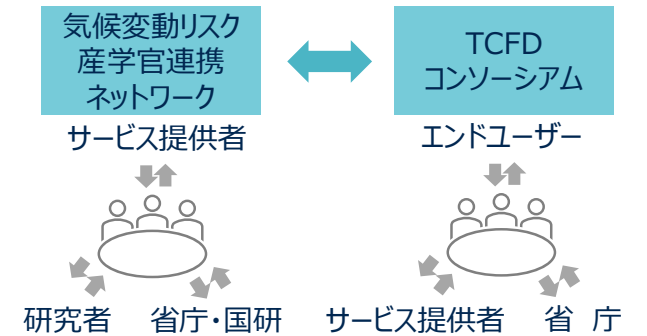
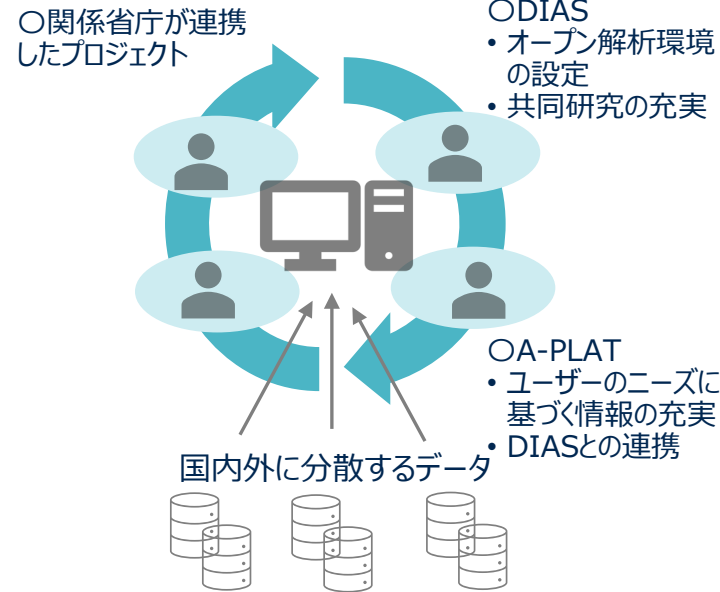
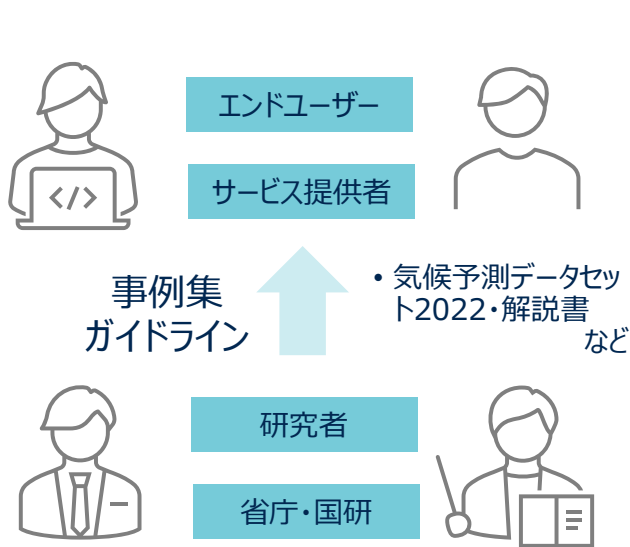
産学官連携プロジェクトを活用したプラットフォーム形成

データ利活用に向けた技術開発

利用目的制限の見直し・利便性の高い課金

今後の施策への提言<ポイント>

- 気候サービス産業の形成：データバリューチェーン構築



- データ利活用に関する情報提供
 - 気候予測データセット2022・解説書 など
- 産学官連携プロジェクトを活用したプラットフォーム形成
- データ利活用に向けた技術開発
- 気候変動インテリジェンスを生み出す技術開発
- 気候レジリエンスに向けたコミュニティ形成コンソーシアム連携
 - 気候変動リスク産学官連携ネットワーク
 - TCFDコンソーシアム など